

<研究ノート>総合学科は生徒にいかなる意識・能力を育てているか：A県B高校での実態調査を踏まえて

KOMIKAWA, Koichiro / 兎美川, 孝一郎

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

161

(終了ページ / End Page)

180

(発行年 / Year)

2017-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013628>

総合学科は生徒にいかなる 意識・能力を育てているか

—A県B高校での実態調査を踏まえて—

法政大学キャリアデザイン学部 教授 児美川 孝一郎

1 研究の背景と課題設定

(1) 総合学科の創設とその後の展開

高校制度において、普通科、専門学科と並ぶ新たな学科として総合学科が創設されたのは、1993年のことであり、以来、20年以上が経過している。総合学科を設置する学校数は、初年度の1994年には7校であったが、2016年現在では371校にまで大幅に増加している（図1を参照）。総合学科に在籍する生徒数が、高校生全体に占める割合は、5.4%である⁽¹⁾。

この数を多いと見るか、少ないと見るか、総合学科の発展を順調と見るか、そうではないと見るかは、議論が分かれるところかもしれない。

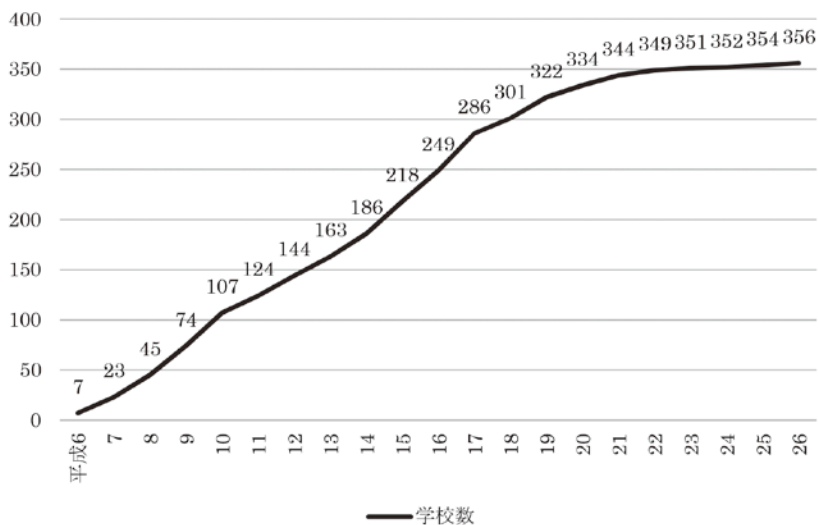
確かに、新たな学科の形態が創設されて、それに合わせた学校を設置するということは、並大抵のことではない。総合学科高校の多くは、すでに存在していた高校（場合によっては、複数の高校）を母体校としているが、それでも、そこから総合学科に合わせた施設・設備の整備、教員の配置、教育課程の編成を行うためには、かなりのエネルギーと資源の投入が必要である。新規の制度にはそうした制約や困難が伴うが、それにもかかわらず、この20数年でここまで総合学科が拡張してきたことは、その堅調な発展ぶりを示しているという評価は、当然にありうる。

しかし、他方で、総合学科の創設時には、それが「高校教育改革のパイオニ

ア」となることが期待され、当時の政策担当者からは、将来的には普通科や専門学科を超えて、高校の学科の主流にすべきだとの声も聞かれたこと⁽²⁾に照らせば、現状は、まだまだ満足のできる状況にはないとも判断できる。少なくとも、その後の文部科学省の政策は、総合学科の展開について、各県の高校通学区域に一つ以上の総合学科を設置することを目指していたふしがある⁽³⁾。そのために必要な総合学科の数は、約500である。現状は、そこにも届いていない。

実際、総合学科の増加ペースを見ても、創設時から2000年代半ば頃までは、かなり高い増加率で推移していたが、それ以降はかなり落ち着いてきている。

〔図1〕総合学科を設置する学校数



また、ここ数年の総合学科の設置は、総合学科の当初の理念を実現するためのものというよりは、少子化の進行によって、定員の充足が困難になった専門学科を統廃合していく手段として、総合学科を活用しているようなケースが見られることも危惧される。

さらに、政策サイドの判断としても、中央教育審議会の答申「今後におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年）が、総合学科について

以下のように指摘していたことも注目されよう。すなわち、「総合学科全体として見た場合、導入当時に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検討が必要である」と。

こうした意味で、発足時には華々しくデビューし、しばらくは順調な発展を見せていたかにも思えた総合学科は、今の時点では、明らかに岐路に立たされているようにも見える。

(2) 本論文の課題の限定

本論文は、以上のような意味で岐路に立つ総合学科の「現在」をよりよく理解することを目的として、総合学科の教育が実際に果たしている役割、端的に言えば、それが生徒たちにいかなる意識や能力を育てているのかを、総合学科高校であるA県B高校の事例に即して考察しようとするものである。

ただし、その際に留意すべき点として、350校を超えるまでに発展してきた総合学科の形態は、実際には学校ごとにより多様であるという事実がある。

総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議の報告書(2000年)を手がかりにすると⁽⁴⁾、総合学科の開設に際しての学科変更の状況には、

- ①普通科からの改編(23%)
- ②専門学科からの改編(27%)
- ③普通科と専門学科とを併設していた学校等の改編(44%)
- ④新設(6%)

というばらつきがある。①④はともかくとしても、占める割合も多い②③の場合、当然、総合学科に設置する系列には、前身となった高校の専門学科の内容を引き継ぐことになる。他方で、報告書によれば、それぞれの総合学科が設置している系列の数は、2系列から9系列設置にまで及び、5～8系列設置している高校が全体の8割を占めるという。要するに、多くの総合学科は、母体校に専門学科が存在した場合には、その専門教育の内容を系列の一つに引き継ぎつつ、その他の系列も複数設置しているのである。母体校に専門学科がなかつ

た場合には、新たに複数の系列を設置することになる。

こうした系列設置の組み合わせパターンを比較すると、総合学科全体では、実に多種多様な組み合わせパターンを有する高校が存在することになる。前記の報告書（2000年）以降の状況を調査した先行研究⁵⁾によれば、全国の総合学科が設置している系列のパターンは、大分類として「普通型」「やや職業型」「職業型」「その他」に分流され、さらに下位の分類を行うと、

- ①「普通型」は、「文系」「理系」「進学特進」「外国語国際」等の8パターン
- ②「やや職業型」は、「スポーツ健康」「看護福祉保育」「情報ビジネス」等の7パターン
- ③「職業型」は、「商業」「農業」「工業」「福祉」等の9パターン
- ④「その他」は、「エコロジー」「美容服飾」「ライフデザイン」等の70パターン以上

になるという。

こう見てくると、総合学科の実態は、設置の際の母体校との関係でも、系列の設置を軸とする教育課程の編成においても、実に多種多様、百花繚乱であることがわかる。そして、今では、この制度の創設時には想定していなかったであろう「進学重視型」の総合学科⁶⁾までもが存在しているという。

とすれば、総合学科を一括りにして、一概に語ることは不可能である。それでは、本論文は、なにゆえに、いかなる基準から、A県B高校を調査対象に選んだのか。端的に言えば、B高校が、全国の総合学科の中での「代表性」や「典型性」を備えた学校であるかどうかについての判断は留保するが、少なくとも筆者が見る限り、B高校は、総合学科の制度創設時の理念に忠実に沿った学校であると思われるからである。その意味で、本論文は、創設時の理念に近いと思われる総合学科についての研究であり、それ以外にも多様に展開している総合学科のすべてをカバーするものではない。

なお、この場合の総合学科の創設時の「理念」とは、教育課程を通じて

- ・ 幅広い選択科目を配置し、生徒の個性を生かした主体的な学習が可能となっ

ていること

- ・将来の職業選択を視野に入れて、自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視していること

である⁽⁷⁾。生徒の卒業後の進路希望としては、大学や専門学校等への進学も就職とともに想定し、かつ、入学時点で進路希望が未定であるということをけっして否定的に捉えず⁽⁸⁾、在学中に進路探究と進路希望の確定ができるようになることを重視するというものである。

(3) B高校の概要

ここで、A県B高校の概要を示しておく。

B高校は、総合学科のみを設置する全日制の共学校であり、各学年6クラスで編成されている。入学者は例年、男子4割、女子6割という男女比である。B高校が総合学科になったのは、2000年のことであるが、前身となった高校は、長く地域に定着していた普通科と農業科の併設校であった。そうした経緯も踏まえつつ、B高校が設置している系列は、人文社会、自然科学、芸術・スポーツ、生活福祉、国際文化、環境科学、食品科学、情報ビジネスの8系列である。

B高校の3年間の教育課程を眺めると、総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」を1年次で2単位、「総合的な学習の時間」を2年次に1単位、3年次に1単位、同じく総合学科の原則履修科目である「課題研究」を3年次に2単位、置いている。これ以外に、学習指導要領が定める必修科目および選択科目を1年次～3年次に配置し、各系列に属する総合選択科目、自由選択科目を2年次に20単位、3年次に24単位、置いている。開設している選択科目の数は、165科目である。このうち31科目は、学年指定がなく、2年次でも3年次でも履修できる。また、選択科目のうち、普通科目は74科目、専門科目は91科目である。

また、B高校の生徒の卒業後の進路は、概ね大学進学が3割、短期大学進学が2割、専門学校進学が3割、就職が1割、進学準備等が1割といった形で推移しており、ここ数年、この比率が年によって変動するようなことはない。

以上を踏まえれば、B高校は、普通教育と専門教育のどちらかに偏ることなく、生徒が自由に選択できる幅広い科目を配置している。そして、生徒の卒業後の進路も、きわめて多様である。これらは、普通科でも専門学科でもない第三の学科としての総合学科としての特色を示すものであり、「自己の進路への自覚を深めさせる学習」を重視するという創設時の総合学科の理念にも合致するものであろう。

(4) 本論文が依拠する調査の概要

A県B高校を対象とした実態調査は、＜付記＞に示した科学研究費補助金に基づく共同研究として行われた。筆者もその研究グループの一員であるが、本論文で使用する調査結果、B高校および総合学科に関する知見は、共同研究グループに負うところが大きい。

全体として実施した調査は、以下のとおりである。

- ① 学校長、総合学科主任、教員へのインタビュー調査（2015年～2016年）
- ② 生徒（高1～高3）に対する質問紙調査（2回、2015年）
- ③ 生徒（高3）への卒業時インタビュー調査（2015年）
- ④ 「産業社会と人間」「課題研究」の発表会の参与観察（2015年）
- ⑤ 高1～高3の教育課程表（2015年）
- ⑥ 生徒（高1～高3）の進路希望調査（2015年）
- ⑦ 生徒（高2～高3）の科目履修状況調査（2015年）
- ⑧ 卒業生の進路先一覧（2015年）

本論文は、①～⑦の調査結果に基づく筆者なりのB高校の教育についての認識をベースにしているが、主要には②④⑧を直接的に参照している。

2 研究の視点

(1) 先行研究の概観

本論に入る前に、本論文の研究上の視点について確認しておく。

まず、先行研究を概観すると、総合学科についての研究は、量的にはそれな

りに蓄積されてきていることがわかる。ただし、管見の限りでは、制度としての総合学科を対象に据え、その全体像を明らかにしたような研究はほとんど存在していない。

唯一の例外として、文科省の委託事業である「総合学科の在り方に関する調査研究」（調査研究機関：東京女子体育大学、研究代表者：服部次郎⁽⁹⁾）は、アンケート調査や実地調査を踏まえて、総合学科の全体像に迫ろうとしたものである。そこでは、「生徒の意識」「指導上の工夫」「産業社会と人間」についての調査、校長および都道府県教育委員会への質問紙調査、卒業生へのインタビュー調査が実施され、総合的・包括的に総合学科の現状を把握しようとしている。報告書からは、総合学科の現状の多様性、指導上の困難や課題、教員配置や教員研修のうえでの課題、中学校の理解にかかわる課題等を読み取ることができ、与えられる知見も少なくない。ただし、全体としては総花的な実態把握であり、個別の論点を十分に掘り下げたものとは言いにくい。

次に、総合学科の全体像ではなく、個別の総合学科高校を対象として、その教育課程編成や実践的な成果に焦点を当てようとした先行研究は、数多く存在している。ただし、これらの研究のなかには、当該校の教育のありようを研究的に対象化して分析・考察するというよりは、たぶんに実践記録・実践報告的なものも少なくない。

本論文の研究関心に比較的近いものとしては、小西による一連の研究⁽¹⁰⁾がある。小西の研究は、パネル調査によって、総合学科という枠組みが生徒の進路意識に与える影響を探ろうとする点で、本論文の問題意識と近いところがあるが、その焦点は、今のところ進路未定者の存在や職業観に当てられているという点で、本論文の視点とは異なる。

（2）総合学科への視線

先行研究というかたちではないが、これまで総合学科がどのように見られてきたのを、教育界の内部での受け止めや教育雑誌の論調などを手がかりに整理しておく。

端的に言って、創設時の総合学科に対する教育界の内部での見方や評価には、次のような二つの有力な潮流があった⁽¹¹⁾。一つは、職業学科との比較の

もとに総合学科を見るものであり、総合学科における職業教育の不完全さを批判するものである。その趣旨は、大幅な科目選択を原理とする総合学科の枠組みでは、職業学科と比較した場合、生徒の学習の系統性が保障されないという点にあった。確かに、総合学科に設置される系列は、生徒に対する履修の目安を示すことはできても、必修科目や選択必修科目のような形で履修を縛るものではない以上、生徒の履修が安易に流れることが危惧された。ここから、総合学科は「食べやすいが、芯のない“おかゆ学科”になる可能性」を否定できないとされたのである⁽¹²⁾。

もう一つは、普通科（の歪さ）との比較から総合学科を評価するものである。青年期教育の視点からすれば、生徒の進路分化が促される高校教育には、普通教育とともに専門（職業）教育が必要であり、学校教育法の高校教育の目的も「普通教育及び専門教育を施す」（第50条）とされている。にもかかわらず、現実の普通科には普通科目しか設置されていない。その意味で、総合学科は、生徒の選択に基づきつつ、普通教育と専門（職業）教育とからなる本来の高校教育を実現する可能性があるとして期待されたのである⁽¹³⁾。

両者の潮流の議論は、総合学科を評価する際の軸が異なっているので、容易に交わるものではない。ただ、創設時においても現在においても、総合学科の設置は、既存の職業学科の統廃合を含んで進展してきたのは事実であり、その総合学科が、職業学科を代替できるものではないという指摘は、耳を傾けるに値する。他方、当時も今も、ほとんどの普通科には（学校設定科目として設置している高校以外には）職業科目が配置されていないという現状は、普通科「上位校」はともかくとして、青年期教育のあり方としても歪さを孕んでいる。その意味での総合学科への期待には首肯できるところがある。

ところで、2000年代以降、小・中・高校の現場にキャリア教育が導入されるようになると、教育界の内部における総合学科への評価や見方には、また別の潮流が有力になってきた。単純に言えば、総合学科はキャリア教育に親和的なカリキュラムを有しており、キャリア教育に熱心な学校が多いというものである。こうなると、総合学科の教育を評価する軸も、「勤労観・職業観」の育成や将来設計能力を含めた「基礎的・汎用的能力」の育成という、キャリア教育の目的の側に寄ってくる。総合学科の理念とキャリア教育の理念には、もちろ

ん重なるところも多いが、総合学科の本来のねらいに注がれる視線は、全体としては薄れつつあるのが現状であろう。

(3) 本論文の研究的視点

以上の点の検討も踏まえ、本論文の研究的視点は、きわめてシンプルに設定することにした。それは、創設時の総合学科のねらいという「原点」に立ち返ることも、職業学科や普通科と比較することでも、キャリア教育の充実度から判断することでもなく、現実には、現在の総合学科の教育が生徒にどのような意識や能力を育てているのかを見るというものである。

以下、A県B高校での調査結果を踏まえて考察していく。

3 B高校の調査から得られた知見

(1) 「職業意識」への注目

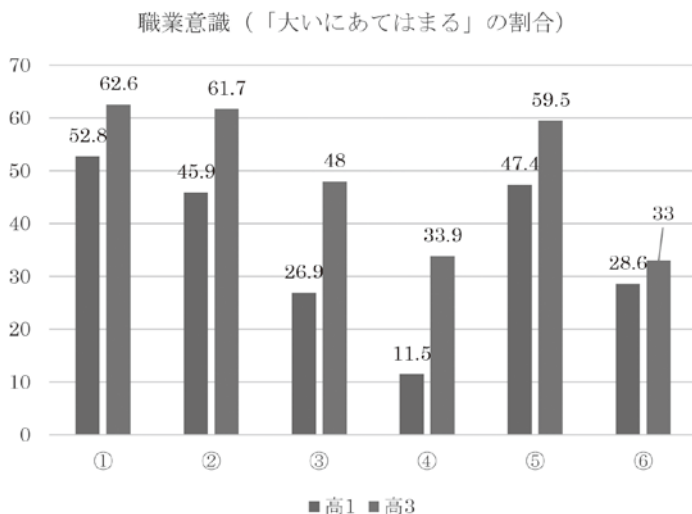
共同研究グループでは、当初、総合学科であるB高校が、実際に生徒に育てている意識や能力は、以下のような意味での「職業意識」ではないかと仮定してみた。この場合の「職業意識」とは、職業学科が育てているような特定の職業に関連する知識や技能ではないが、「特定の職業に向かおうとする意識や能力」のことを指している。別の言い方をすれば、「職業教育」としては不十分であるかもしれないが、効果的なかたちで「職業意識の教育」を行っているのではないかと考えたわけである。

この仮定の妥当性を検証する目的で、高1～高3の全生徒を対象とした質問紙調査では、第一回実施の際から、次のような「職業意識」を尋ねる質問項目を入れていた。

- ①職業について考えることがある
- ②将来つきたい職業がある
- ③今後の進路と職業について具体的に考えている
- ④将来の職業のために準備している
- ⑤進学するならば、将来の職業を重視して選ぶ
- ⑥将来、働くことのイメージをもっている

はてして、結果はどうだったか。

グラフは、第二回実施の調査（10月実施）から、各質問に対する5段階の選択肢のうち「大いにあてはまる」と答えた生徒の割合を高1と高3で比較したものである。



全体を見れば、①～⑥の質問項目に対する肯定的回答は、学年進行で上昇している。そのことは、総合学科の教育を受けることが、生徒の「職業意識」を高めることになると予見させなくはない。ただし、気になるのは、③④⑥の質問に対する肯定的回答の数値が低いことである。これらは、①②⑤の質問とは違って、漠然と職業を意識しているだけでは肯定的に回答できず、具体的な特定の職業を前提として、その職業に向かおうとしていることを必要とする。そして、この数値が低いのである。

実際、各質問に対する肯定的回答が、高1から高3にかけて学年進行で上昇するのは、特段にB高校の教育の成果ではなく、年齢の上昇による効果だとも言ってしまう。高3ともなれば、当然、就職を含めた卒業後の進路を具体的に考えざるをえなくなるという事情もあろう。

実は、全生徒を対象とした質問紙調査では、B高校が総合学科の教育課程と

して実施している、①高1の「産業社会と人間」、②高2の「キャリアプランニング」（総合的な学習の時間）、③高3の「キャリアデザイン」（課題研究）の各単元、および④インターンシップ、⑤総合学科研究発表会について、自分の将来や卒業後の進路に役立ったかどうかを聞く質問項目が設けられている。そして、先の「職業意識」に関する質問項目と、これらの教育課程の各メニューについての質問項目の関係をクロス集計したところ、ほとんどの項目で相関関係がないことが判明した。

要するに、生徒たちの「職業意識」は年齢（学年）とともに上昇するかもしれないが、それが、総合学科の教育のどの部分の影響を受けたものだと想定することができないのである。

(2) 「キャリア意識」への着目

以上の結果を受け、共同研究グループでは、当初の仮説の修正・変更を検討し、総合学科であるB高校が、実際に生徒に育てている意識や能力は、次のような意味での「キャリア意識」ではないかと仮定し直してみた。ここに言う「キャリア意識」とは、キャリアに関する意識全般を指すのではない。①将来や進路は自ら探求し、自己決定し、実現していかななくてはいけないという自覚であり、②そのために必要な汎用的な能力を身につけようとする意識のことである⁽¹⁴⁾。

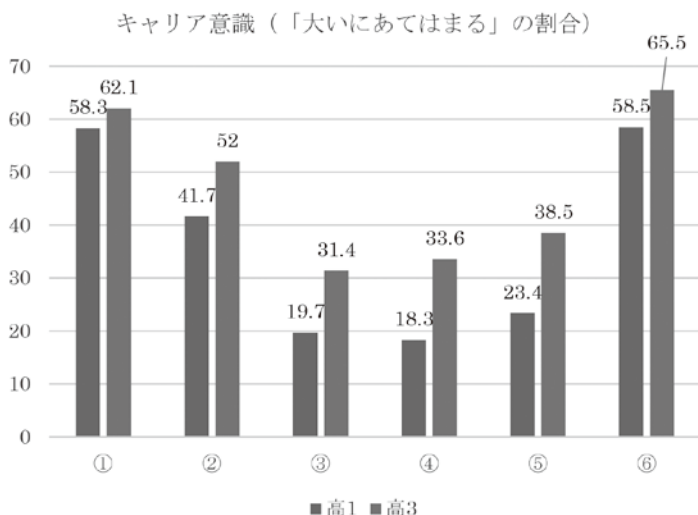
このことを検討するために、高1～高3の全生徒を対象とした質問紙調査の第二回実施の際には、以下のような「キャリア意識」に関する質問項目を追加した。

- ①入学時よりも、将来の職業や進路など自分のことは自分で決めようと意識するようになった
- ②入学時よりも、自分で考えたり行動したりするようになった
- ③入学時よりも、将来、社会に出て行くことに自信が持てるようになった
- ④入学時よりも、自分の意見を発言できるようになった
- ⑤入学時よりも、うまくいかないことや失敗することがあっても、ねばり強く取り組めるようになった

⑥入学時よりも、職業や進路に関心を持つようになった

では、生徒の「キャリア意識」に関する質問への回答は、どうだったか。

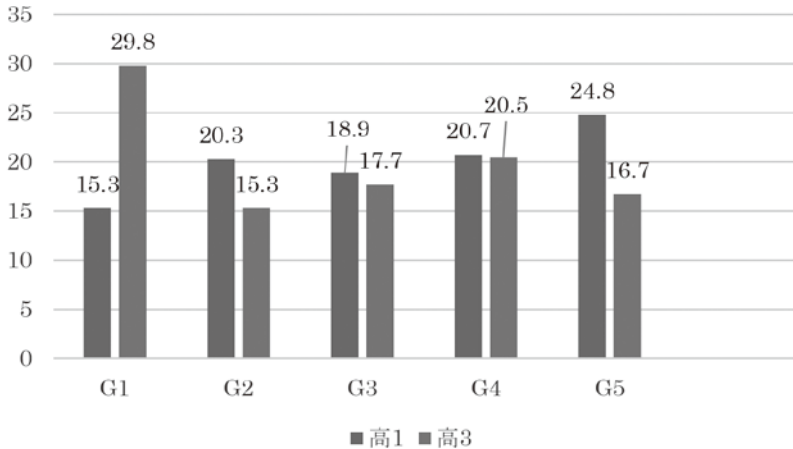
グラフは、「職業意識」に関する質問項目と同様に、第二回実施の調査（10月実施）から、「キャリア意識」についての各質問に対する5段階の選択肢のうち「大いにあてはまる」と答えた生徒の割合を高1と高3で比較したものである。



質問の①⑥を除くと、生徒にとっては、それなりにハードルの高い質問内容である。それゆえ、肯定的回答の割合は、「職業意識」の各質問と比較して高くはない。しかし、学年進行に応じて、肯定的回答の割合は増加している。とりわけ、高1の時点で肯定的回答の低い質問ほど（③④⑤）、増加率が高くなっている。

試みに、「キャリア意識」に関する各質問を総合して、高1～高3の生徒をキャリア意識の高いグループ（G1）から低い（G5）にまで分類して、その比率を学年別に表すと、以下のグラフのようになる。

キャリア意識のグループ別比率



ここでも、高1から高3にかけて、「キャリア意識」の高いグループが増加していくことがわかる。

そして、「職業意識」に関する質問と同様に、「キャリア意識」の各質問項目と①高1の「産業社会と人間」、②高2の「キャリアプランニング」(総合的な学習の時間)、③高3の「キャリアデザイン」(課題研究)の各単元、および④インターンシップ、⑤総合学科研究発表会についての質問との相関関係を見てみた。結果は、②の各単元のいくつかを除くと、他のほとんどの項目で有意な相関関係を認めることができた。②の単元のいくつかは、なぜ相関しないのかについては、根拠のある分析はできないが、単元の内容じたいが、平和学習講演、オープンキャンパスの振り返り、研修(就学)旅行に関するものであり、いわば考え抜かれた教育課程であるというよりは、学校行事連動型のものであったことの影響があるようにも推察された。

以上のことから、総合学科としてのB高校の教育が生徒に育てている意識や能力は、「職業意識」であるというよりは「キャリア意識」であると推察できるのではないかと。もちろん、「キャリア意識」の上昇についても、加齢による自然な成長といった側面を無視することはできない。しかし、そこには少なくとも、B高校の教育課程の影響や効果が働いており、それが加齢による効果に

プラスされていることが推測できよう。

4 考察

(1) 調査の仮説に関して

以上の分析を踏まえたうえで、いくつかのコメントを付記することで、本論文の考察に代えたい。

共同研究グループは、まず、総合学科としてのB高校が生徒に育てているのは、専門（職業）学科と同様の意味での、特定の職業についての職業的知識や技能ではないだろうという点を出発点とした。それは、B高校が職業学科を前身に持った総合学科だとしても、それは設置している系列の一つに移行できただけで、すべての系列に関して、フル装備の職業教育を実施するような体制にはなっていない（施設・設備、教員スタッフ、予算、教育課程のすべての面で）と判断したからである。

そこで、育てているのは、具体的な職業的知識・技能ではないが、特定の具体的な職業に向けての意識であるという意味での「職業意識」ではないかと考えてみた。それは、別の見方をすると、専門（職業）学科＞総合学科＞普通科というグラデーションで見た場合、総合学科は、職業への意識を育てるという点では、専門学科には劣るかもしれないが、普通科には勝る、それが総合学科の特色なのではないかと想定したということでもある。

しかし、期待は見事に裏切られた。そこで、共同研究グループでは、調査の仮説的視点を「職業意識」から「キャリア意識」に切り替えることになったが、その際にヒントを与えられたのは、学校長および総合学科主任の教諭へのインタビュー調査であった。結論だけを言ってしまうと、両者の語りから理解したのは、B高校が生徒に育てようとしている力は、特定の職業についての知識や技能でも、意欲や態度でもなく、もっと幅広い意味で、生徒たちが社会に出た時に困らないための汎用的な力、いわば社会的自立を促すことなのではないかという点であった。

確かに、総合学科としてのB高校は、いくつかの系列に職業に関する科目を配置している。しかし、それらの科目の意義は、特定の職業分野へと生徒を送り出すことにあるのではなく、特定の職業に関する教育を受けることが、生徒

が自らの将来を考えるためのオリエンテーションの機能を果たすととともに、職業に関する教育を本気で受けることを通じて、実際には他の分野や領域でも通用する基礎的・汎用的能力を獲得することに置かれているように見える。これは、大胆に言いきってしまえば、B高校における職業科目は、「普通教育としての職業教育」⁽¹⁵⁾の役割を果たしているということでもある。

(2) 生徒の卒業後進路

以上のことは、B高校の生徒の卒業後の進路状況と照らしあわせてみると、大変に興味深い。

同校の生徒の卒業後進路が、概ね大学3割、短大2割、専門学校3割、就職1割、進学準備等1割という状況にあることは、すでに指摘した。専門学校を含めて、進学が8割を占めるわけであるが、卒業生の進路先一覧(2015年)を一瞥してみると、注目すべきことがある。それは、進学の場合に生徒たちが選ぶ学部・学科には、特定の職業と結びついた学部・学科が圧倒的に多いという事実である。これは、専門学校進学のみを取り出せば、さほど驚くべきことではないのかもしれないが、大学や短大への進学の場合にも、看護、医療、福祉系を中心とした進学が多く、専門学校進学と見紛うばかりである。そして、専門学校進学の場合にも、大都市部の進路多様校の教員からよく聞かれるような、生徒たちの「カタカナ職業」学科への志向(憧れ)のような傾向⁽¹⁶⁾が皆無であることを指摘しておく必要がある。

このことは、何を意味しているのか。まず言えることは、B高校の生徒たちの進路選択の仕方は、きわめて手堅い。学校側の指導、とりわけ進路相談などの影響もあると思われるが、それ以上にB高校の「キャリア意識」を育てる教育課程の効果があるのではないかと。つまり、生徒は、高校3年間の学びを通じて、特定の職業と結びついた学部・学科を選択することができるほどに、自身の将来の方向性を固めることができているということである。これは、近年では、高校生全体の傾向として、自己の志望や将来展望を十分に固められないがゆえに、「つぶしの効く」学部や「選択肢の幅の広い」学部が好まれる⁽¹⁷⁾こととは、まさに対照的なことであろう。

言い方を代えれば、B高校の生徒は、在学中に「キャリア意識」を形成し、

その結果として得た将来の方向性にかかわる「職業意識」の形成、そして具体的な職業的知識・技能に関する職業教育は、卒業後の大学・短大や専門学校で受けるという流れで進路形成をしている。もちろん、B高校には1割ほどの高卒就職者が存在するが、彼らは、地元企業の日本型雇用が、入職時点での職業能力は問わないという新規学卒採用の仕組みに乗ることで、具体的な職業的知識・技能に関する教育は、入職後の企業内教育を通じて受けているわけである。B高校が、こうした進路構造をつくりあげていることは、総合学科としての一つの選択として、理にかなったものでもあろう。

(3) 何が「キャリア意識」を育てるのか

では、B高校の教育課程が生徒たちに「キャリア意識」を育てているという点は、すでに述べたとおりだとして、何がそれを可能にしているのか。

総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」や「課題研究」等の総合学科らしい教育課程が、一定の効果を発揮していることは、先に見た調査結果からも間違いないことであろう。ただ、それだけではないのではないか。ここから先は、十分な根拠データがあるわけではないので、あくまで推測であることを断っておくが、先に指摘した「普通教育としての職業教育」に該当する職業科目を学んでいることや、そもそも多様な系列内に配置された科目群の中から、生徒が自ら履修科目を選択するという経験を繰り返させていることが、大きな影響を及ぼしているのではなかろうか。もちろん、ここには、学校側の履修指導・学習指導という要素も付加的に絡んでくる。

仮にそうだとすれば、これは、現在、日本中の高校で実践されているキャリア教育のあり方に対しても、一定の問題提起的な意味を持つのではないか。つまり、キャリア意識の形成には、「総合的な学習の時間」や特別活動を通じて実施されている、キャリア教育に関する「取り立て指導」のみが意味を持つのではなく、学校の教育課程全体が効果を持つということであり、職業科目を学ぶことが、職業教育としての意義だけではなく、キャリア教育としても重要な意義を持つということである。

(4) 「私の将来の夢は～になることです」への回収

最後に一つだけ、筆者が感じた軽い違和感について。端的に指摘すると、B高校が育てている「キャリア意識」は、わりと直線的に、生徒の将来の「夢」や「やりたいこと」「就きたい職業」に直結しがちなのではないか。

こう感じたのは、高1の「産業社会と人間」の最後の段階での発表会を参与観察したことによる。生徒の発表は、ほとんどが「私の将来の夢は～になることです」に始まり、そのために「高校生活では～を頑張ります」という構図に回収されていた。そこには、当然のことであるが、学校や教師側の指導も入っているであろうか。

もちろん、夢を持つことは大切なことである。将来就きたい職業があれば、その目標に向けて、高校生活を充実したものにしていくこともできる。先に示したようなB高校の生徒の卒業後進路の特徴は、こうした指導や教育の賜物であると言えなくもない。ただ、筆者自身は、こうした指導が「やりたいこと」主義にまでなってしまうと、かえって生徒の視野を狭め、将来の進路の選択肢を狭くしてしまう危険性もあることをつねづね主張してきた⁽¹⁸⁾。B高校の生徒にこうした危惧が該当するのかどうか、この点については、臆断は慎むべきであろう。今後、より詳細な分析・考察の機会を持ちたい。

<付記>

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究C）「総合学科『産業社会と人間』の職業・キャリア教育の効果とモデル構築」（平成26年度～28年度、課題研究番号26381286、研究代表者・太田政男）に基づく研究成果の一部をまとめたものである。

[注]

- (1) 文部科学省「平成28年度学校基本調査（速報）」
- (2) 寺脇研『動き始めた教育改革—教育が変われば日本が変わる!!』主婦の友社、1996年、を参照。
- (3) 総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議「総合学科の今後の在り方について—個性と創造の時代に応える総合学科の充実方策」

2000年、を参照。

- (4) 同上
- (5) 阿部英之助ほか「高校総合学科における『職業教育度』と『母体校の編成』との関係」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』第64集、2014年
- (6) 阿部英之助ほか「クラスター分析による高校総合学科の類型分析：『普通科型』総合学科の分析を中心として」『和歌山大学教育学部紀要教育科学』第65集、2015年、を参照。
- (7) 文部省初等中等教育局長通知「総合学科について」1993年3月22日、を参照。
- (8) 文部科学省「幅広い科目のなかから選んで学ぶ総合学科」（パンフレット）2014年、を参照。
- (9) 『総合学科の在り方に関する調査研究報告書』2012年
- (10) 小西尚之「高校生はいつ、どのように進路を決めるのか—継続的調査における進路未定者の特性と動向」『北陸大学紀要』38、2014年、同「高校在学時から卒業後にかけての職業観の変化—総合学科卒業生に対する追跡調査から」『北陸大学紀要』40、2016年
- (11) 小島昌夫「総合学科をめぐる問われているもの」教育科学研究会ほか編『高校教育のアイデンティティ—総合制と学校づくりの課題』国土社、1996年、を参照。
- (12) 多湖勲「『総合学科』は高校改革のパイオニアになりえるのか」『高校生活指導』第128号、1996年、など参照。
- (13) 小島昌夫「『総合学科』について検討する」『季刊高校のひろば』17号、1995年、国民教育文化総合研究所『教育総研年報2004』2004年、など参照。
- (14) 中教審が示したキャリア教育で身につけるべき能力と対照すれば、①は「キャリアプランニング能力」を具体的なスキルの次元ではなく、より大きな人生観・進路観の次元に落としたもの、②は「人間関係・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」（狭義の）「キャリアプランニング能力」といった基礎的・汎用的能力に対応する。中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』2011年、を参照。
- (15) シンポジウム「普通教育における職業教育の可能性」『産業教育学研

究』41巻1号、2011年、を参照。

- (16) このことが孕む問題性については、荒川葉 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』東信堂、2009年、を参照。
- (17) 拙稿「選択の自由の落とし穴」『月刊高校教育』2017年2月号、学事出版、を参照。
- (18) 拙著『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書、2013年、拙著『夢があふれる社会に希望はあるか』ベスト新書、2016年、を参照。

ABSTRACT

What awareness and competences does the comprehensive course curriculum of high school raise for students?

: Based on the Investigation of B High School in A prefecture

Koichiro KOMIKAWA

The purpose of this paper is to clarify what awareness and competences the comprehensive course curriculum of high school raise for students. In order to approach this aim, I conducted several surveys with my cooperative researchers. As a result of questionnaire surveys for students and interviews with teachers, I could find out the following point. To put it briefly, the comprehensive course curriculum of high school prepares not only the vocational guidance but also the career awareness and competences for students. This is a characteristic of the comprehensive course curriculum which is different from both academic and vocational course.